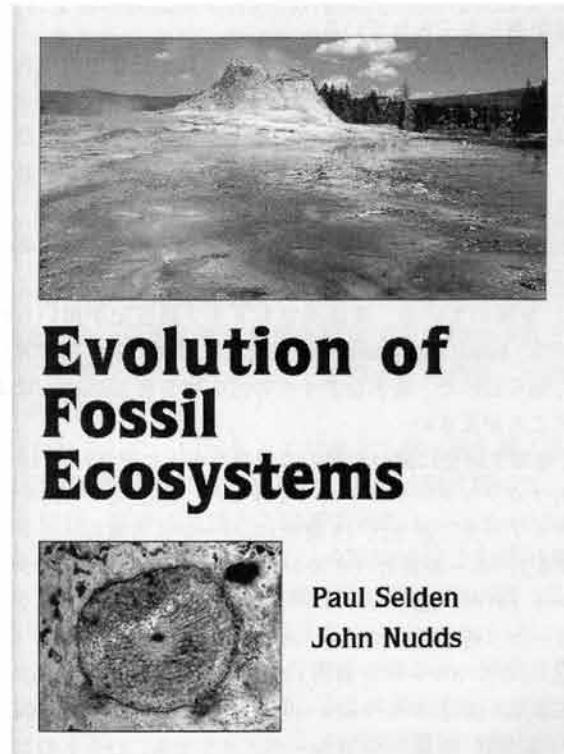
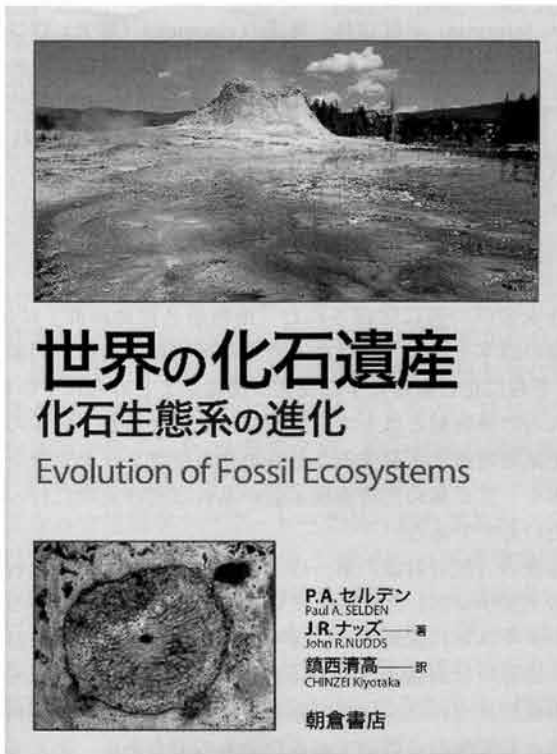


新刊紹介 Paul A. Selden, John R. Nudds 著, 鎮西清高訳
「世界の化石遺産 化石生態系の進化」
朝倉書店, 2009年11月発行, A4版, 160ページ, 本体4,900円,
ISBN978-4-254-16261-5

安藤 寿男*



このたび「世界の化石遺産 化石生態系の進化」と題する訳書(写真左)が2009年末に出版された。原書は英国のマンチェスター大学の古生物学者 P. A. セルデンと J. R. ナッズが、2004年に“*Evolution of Fossil Ecosystems*”として Manson Publishing から出版した解説書(写真右)である。評者は原書のタイトルに興味を惹かれ、授業のネタになりそうと思い買い揃えていたが、本格的に読む機会もなくそのままになっていた。今回両者を見比べてみると、ページ

数、レイアウト、写真や挿図の画質が全く同じになっており、訳書は、原書のスタイルを保持したまま活字部分だけが和文になった正真正銘の翻訳本である。価格は、ネット書店などで見る原書の値段と大して違わないところに設定されており、両方揃えても1万円は越えない。総ページ数が160ページと決して厚い本ではないが、266枚のカラー写真と挿図が小さな活字の多量の解説記事中にふんだんに散りばめられていることを考えると、この値段設定は朝倉書店としては良心的な方であろう。両者を並べ比べて、英語表記の確認や、逆に英語の表記をどう和訳していけばいいのかといった、専門書による語学学習の素材にもできそ

受付: 2010年5月11日

* 茨城大学理学部地球環境科学領域
2-1-1 Bunkyo, Mito, Ibaraki, 310-8512, Japan

うである。

タイトルの「世界の化石遺産」は訳者が追加したものであるが、本書の構成や解説内容からすると適切に思える。原題から想像される生態系進化の通史は、あることにはあるが、全14章のそれぞれに少しずつ分けて記載されており、一気に読み通すようにはなっていない。これは、原生代末以降の化石ラガシュテッテンを一冊の本で簡潔に紹介することで、過去の生態系の進化のほとんど完全なイメージを得ることができる、という著者らの目途があるにほかならない。つまり、本書は14箇所の著名かつ極めて重要な化石産地とその化石群を個々に要約した、オムニバス形式の解説書なのである。数ある世界の自然遺産の中で、生態系進化のイメージを人類に語りかけてくれる珠玉の化石遺産が選りすぐられている。

ところで、「化石ラガシュテッテン」は、近年の古生物分野ではよく知られるところとなっているが、地質分野全般では必ずしも一般的になっているとは言い難いので確認しておこう。この語は、きわめて保存のよい化石群が、鉦山の鉦脈に例えてドイツ語で Fossil Lagerstaetten (複数形: 単数形は Lagerstaette) と呼ばれたことに由来する。化石鉦脈と訳されることもあるが、本書では化石ラガシュテッテン (ン) を用いている。英語圏でもドイツ語表記が用いられるのは、Fossil Lagerstaetten の重要性を世界の古生物学界に広く知らしめた、著名なドイツの古生物学者 Seilacher によるところが大きい。

「地球生命史に開いた窓のようなもの」と記された14の化石ラガシュテッテンを挙げてみよう。原生代(1箇所): エディアカラ; 古生代(5箇所): パージェス頁岩(カンブリア紀)、スーム頁岩(オルドビス紀)、フンスリュックスレート(デボン紀)、ライニーチャート(デボン紀)、メゾンクリーク(石炭紀); 中生代(5箇所): ポルツィア砂岩(三畳紀)、ホルツマーデン頁岩、モリソン層、ゾルンホーフエン石灰岩(以上ジュラ紀)、サンタナ層とクラト層(白亜紀); 新生代(3箇所): グルーベ・メッセル、バルトのコハク(以上古第三紀)、ランチョ・ラ・ブレア(第四紀)

堆積学徒なら少なくとも数カ所以上の名に思い当たるであろうし、日本の自然史系博物館の展示を丁寧に探せば殆どの箇所は標本として展示されている。このほかにもそれぞれの箇所に比較される化石ラガシュテッテンとして、例えば、カンブリア紀のパージェス頁岩に比較される中国の澄江(Chengjiang)やジュラ紀後期のゾルンホーフエン石灰岩(ドイツ)によく似た中国の遼寧(Liaoning)(ジュラ紀後期~白亜紀前期)などが簡潔に解説され、14箇所に限られた事例を普遍化するような配慮がなされている。

各章は各産地の研究史や発見にまつわる背景、層序・古環境・タフオノミー、化石群の構成、古生態の考察、他のラガシュテッテンとの比較が事細かに書かれている。主要文献も半ページから1ページ以内で挙げられており、研究史の理解に役立つだけでなく、興味があればそれらを辿ってみたい気にさせてくれる。どの章もカラーの地質図や地質柱状図が提示されており、化石ラガシュテッテンの地質学・層序学的背景の記述から、個々の化石ラガシュテッテンの形成過程のイメージが浮かび上がってくる。古生物学の専門書は化石の生物学的記述が多い、という先入観を払拭するに十分な量の堆積学的情報が記されている。また、化石や化石産地に関わる歴史には興味深いものが多く紹介されている。例えば、コハクが古代ギリシャではエレクトロン(elektron)と呼ばれ、英語のelectricity(電気)はコハクを柔らかい布で擦ったときに生じる静電気現象に由来するという。一方、グルーベ・メッセルの産地は1970年代初頭、州政府によって産業廃棄物処理場の設置が決定され80年代には工事が始まっていたが、20年来の反対運動の末1990年代になってようやくそれが撤回され、1995年に世界遺産に登録された。この5月の連休に放送された世界遺産のテレビ番組でその様子が紹介されていた。

巻末索引の前に付録された「博物館と産地訪問」には、実際の標本を展示・所蔵する世界の博物館の名前が列挙され、さらに化石産地見学に役立つ情報がまとめられている。これらの博物館とはとても比較にはならないが、日本の自然史系博物館で所蔵するこれらの化石ラガシュテッテンの標本を一堂に集めた特別展示会があればぜひ見学に行ってみたいものである。

本書の『読者対象の第一は大学院生・学部学生、化石好きのアマチュア』と記されているが、学部の古生物学の授業のテキストに採用するにはやや専門的すぎるので、参考書、あるいは副読本としては大いに推奨できる。地球生命史の概観にも役立つはずである。また、古生物百科事典的な書として座右に置いておきたいものでもある。あえて難詰するならば、本文中の記述の中に、おそらく分野外の読者には馴染みのない専門用語がかなり多く使われているところであろう。訳書では、レイアウトの関係でスペースに余裕がなく不十分との断り書きがあるが、訳者が適宜訳注を加えてくれているので、読み進めるのに役立つであろう。

以上のように本書は、地球科学関連分野では類書をみない優れた訳書であることが容易に理解されるであろう。学生、研究者を問わず、地質学、堆積学、地史学分野の学徒が揃えておきたい書である。